

赤崎さん 潜在的に明るい光への憧れを持っていたのかもしれませんが。

■我ひとり荒野を行く^{あれの}

市長 戦後、七高(現・鹿児島大学)から京都大学に進めますが、ご自分の進むべき道もこの頃決められたのですか。

赤崎さん その頃はまだ決めていません。七高の寮で同室の京都の中学出身の友達の影響もあり、大学は京都に行きたいと思うようになりました。

市長 京大で今の研究をされたのですか。

赤崎さん 京大の頃は信州の山へ行ったり結構遊んでいました(笑)。卒業後、神戸工業(現・富士通㈱)という会社に入りました。大学みたいな名前で、神戸工業大学というあだ名がついていましたが、野武士の集団のようなところがありました。まもなく、技術革新によりテレビの放送が始まりました。

市長 当時のテレビは私も小さい頃から見ていました。

赤崎さん 冷光(ルミネッセンス)にかかわりはじめたのはこの頃です。テレビを映し出す蛍光体から出る光にすごく惹かれ、生業(なりわい)にすることにしました。

市長 光の可能性に夢中になられたのですね。

赤崎さん はい、これが原点で、いつのまにか一生かわることになりました。そしていろいろな結晶を扱って今のような研究をすることになりました。

市長 最終的には世界最高の栄誉といわれるノーベル賞を受賞されるなど素晴らしい成果をあげられました。その道のりではご苦労もあったと思います。

赤崎さん 苦労といいますが、やりたいことをやってただけです。ブラウン管用蛍光体は小さい粉末結晶です。単結晶の膜を作ればうんと明るいものができると考えていました。1959(昭和34)年から名古屋大学で取り組んだゲルマニウムの「単結晶薄膜」の研究が新設の㈱松下

電器産業東京研究所長の目にとまり、誘われて転籍し、そこで、かねて温めていた光る半導体(LEDなど)の研究を開始。赤色・緑色LEDにつづき、青色と考えたとき、青色LEDが未到であることが分かり、「これこそ自分のやるべき仕事」と決心しました。

市長 青色のLEDはできないというのが当時の常識で、多くの研究者が諦めたと伺っています。そのような状況でも信念をもって地道に取り組まれたのですね。

赤崎さん 誰がやってもできないことをやるのは無謀と言われていました。「我ひとり荒野を行く」という心境です。会社の上層部の目にも、海のものとも山のものともつかない研究と映っていたようで、会社に内緒で国家プロジェクトに応募しました。その後も研究を続け、1981(昭和56)年には再び名古屋大学に戻り、1989(平成元)年に青色LEDを誕生させることができました。



名城大学附属図書館内のノーベル賞受賞記念展示コーナー



名古屋大学の赤崎記念研究館展示室

■未来ある若者へ

市長 赤崎先生が実現された青色と、それまでの赤色や緑色により、白色の照明やフルカラーのディスプレイなどの実用につながり、世界の人が恩恵を受けています。本市でも、みなと大通り公園などをLEDのイルミネーションで鮮やかに彩っていますが、さらに100万球のLEDが光輝く「天文館ミリオネーション2016」を初めて開催します(今月8日メイン会場の天文館公園で点灯式)。このように、先生の生み



森 博幸 市長

出されたLEDも活用して交流人口を増やし、まちのにぎわいを創出し、滞在型観光の推進や地域活性化を図りたいと考えています。

最後に若者へのメッセージをお願いします。

赤崎さん いつも口癖のように言っているのは「はやり」とらわれないで、本当に自分がやりたいことをしてくださいということです。それを見つけるのは簡単

ではありませんが、本当に好きであれば、できなくても続けられると思います。また、「失敗」はこのやり方では駄目だという「教訓」だと思っています。英語のことわざに「経験は最高の師」(Experience is the best teacher)とあるように、失敗してもそれ自体が貴重な経験だと思っています。

市長 本日はお忙しい中、素晴らしいお話をいただき、本当にありがとうございました。



昨年6月、母校の大龍小学校の児童と交流された赤崎さんご夫妻

2014年ノーベル物理学賞受賞

2014(平成26)年10月7日、スウェーデン王立科学アカデミーは、「明るく省エネルギーの白色光源を可能にした高効率青色発光ダイオードの発明」に対し、赤崎勇氏(名城大学)、天野浩氏(名古屋大学)、中村修二氏(米カリフォルニア大学サンタバーバラ校)に、2014年ノーベル物理学賞を授与すると決定しました。日本の受賞者は当時計22人となる偉業でした。(現在は計24人)

ノーベル賞授賞式は、スウェーデンのストックホルムのコンサートホールで行われ、カール16世グスタフ・スウェーデン国王からメダルとディプロマ(証書)が授与されました。ノーベル賞委員会のアン・リイリエ氏が物理学賞の3人の研究を紹介し、「100年以上前にノーベルはかつて人類に大きな貢献をした人に物理学賞を贈るように言った。彼らはその望みに見事に応えた」と述べました。その後、赤崎さんは、家族とともに晩さん会に出席し、約1300人の参加者からあらためて祝福を受けました。

赤崎さんは、スウェーデンでの授賞式から帰国後、羽田空港での記者会見に臨みました。

「盛大な授賞式で少し緊張しましたが、記念講演をまとめることができ、ほっとしました。また、国王陛下、王妃様と一緒に写真を撮らせていただいた際、話しかけていただき感激しました」と感想を述べられ、報道陣の求めに応じて受賞したメダルを披露されました。



© The Nobel Foundation
写真提供：名城大学